

ヒトとつながるカヤツリグサ科植物
—観賞用に取引されるカヤツリグサの仲間たち—

元(公財)日本植物調節剤研究協会
技術顧問

森田 弘彦

「山から採取したコケを売って、年に数千万円を稼ぐ話」がTV番組に流れる現代にあっては、あらゆる種の植物とその部位が「観賞」の対象にされる。従って、カヤツリグサ科の植物も、ランやキクの仲間の華やかで色彩に富む花々とは別な部位を観賞に供されてきた。カヤツリグサ科の観賞用植物の筆頭は何といってもカミガヤツリ(パピルス: *Cyperus papyrus* L.)で、古代エジプトではスイレンやナツメヤシと並んで神殿の柱や壁画などのモチーフに使われ(図-1)、現代でも花きとしての地位を保っている。ここではパピルスの他にも「観賞用植物」として知られるいくつかの種を探ってみよう。

ミカヅキグサ属でアメリカ合衆国の南東部原産とされる *Rhynchospora colorata* H. Pfeiffer は、基部の半分ほどが白化した数枚の苞葉と白い花序を持ち、近頃シラサギガヤツリの名で園芸店に並ぶようになった(図-2)。類似の種として、原産地には苞葉の幅の広い *R. latifolia* W. W. Thomas が分布し、また、中央アメリカに分布する *R. nervosa* Baockeler がタイなど熱帯の諸国で観賞用に販売される。

近年、「白化剤」と呼ばれる新規の成分を含む水稲用除草剤が普及に移され、これによるミズガヤツリの効果発現症状や、ごく稀に水田で誤用された場合にイネに発現する症状(図-3)を見ると、シラサギガヤツリの苞葉が連想される。

東南アジアなど熱帯の芝地、公園、路傍には、ヒメクグ属で白い花序(穂)を着けるオオヒメクグ *Kyllinga nemoralis* Dabdy ex Hutch. & Dalziel (図-4) がごく普通に見られる。



図-2 苞葉の下部と花序の白色部を目当てにした観賞用植物、シラサギガヤツリ (*Rhynchospora colorata*)

熱帯の諸国では芝生の一部に使われているようにも見える雑草であるが、日本では「ユキボウズ」の名で園芸用に流通している。

緑色の葉をそのまま観賞する植物としては、マダгалカル原産とされる高さ1.5mにも育つシュロガヤツリ *Cyperus alternifolius* L. (図-5-A) が古くから知られ、かつては「観葉植物として温室内に多く鉢栽培し、装飾に用ひられ、又切葉用に供せらる。(村越三千男「内外植物原色大圖鑑(第10巻)」1936)」状態であったが、現在では野外にも植栽されるほか、関東地方以西などで河川や湖沼などに逸出・野生化して帰化植物になっている。

中国南部福建省あたりの原産とされるスゲ属のテンジク



図-1 パピルスの群落から飛び立つ水鳥の壁画を模したエジプトの絵はがき(1990年代)



図-3 「白化剤」と称される成分を含む水稲用除草剤による白化症状(A: 効果発現中の雑草ミズガヤツリ、B: 水田での誤用によると推定される、部分的に白化したイネの葉)

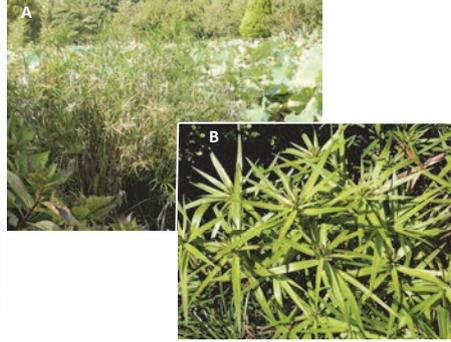


図-4 「日本で「ユキボウス」の名で流通する、図-5 葉を観賞するカヤツリグサ科植物、シュロガヤツリ (A : *Cyperus alternifolius*) と

熱帯の芝地雑草オオヒメグ (*Kyllinga nemoralis*)

図-6 アクアリウム用などに流通する日本のカヤツリグサ科水田雑草、ヒメホタルイ (A : *Schoenoplectus lineolatus*) とマツバイ (B : *Eleocharis acicularis* var. *longiseta*)

スゲ *Carex phyllocephala* T. Koyama (図-5-B) は、シュロガヤツリより草丈が低くて苞葉の幅が広く、水湿地でなくともよく生育することから、関東地方以西では屋外でも栽培される。シュロガヤツリにもテンジクスゲにも葉に斑の入った品種がある。

カヤツリグサ科の現役の水田雑草も結構「観賞」されている。鹿児島県の干拓地の水田などがかつて問題となった多年生雑草のヒメホタルイ (*Schoenoplectus lineolatus* T. Koyama) が、東北地方のある道の駅の園芸店で1鉢500円の値をつけられているのを見たときにはいささか驚いた(図-6-A)。「丈夫で毎年発生し、草丈が低い」などの特徴が、室内園芸やピオトープに適しているらしい。さらに、Webで探すとヒメホタルイより一段と草丈の低いマツバイ (*Eleocharis acicularis* Roem. & Schult. var. *longiseta* Senson) も、ヘアークラス (hairgrass) の名前で水草として取引の対象になっているとのことである。鹿、猪、犬、猫、馬など多くの動物の毛の名で呼ばれるマツバイ (図-6-B) は、江戸時代の文政年間に書かれた農書「農業餘話 (小西藤右衛門1828)」で、イネの雑草のウシノケとしてその生態と防除を以下のように紹介された。

○田に牛の毛と称して牛ノ毛の如き草生づるは究めて瘠
 地か新田か其外冷水の入り口か又は時々水絶て田面乾
 く所に生ずるものな里 土の堅閉を好みて生ずと見えたり
 されば麦糠か麦のカシラ毛 ホウジャウとも云ふ 等をこ
 えに用ふれば忽ち絶ゆ (後略)

水田雑草としてよく知られたマツバイであっても、これに好感を示す向きは結構古くからあったようで、東北地方の旧庄内藩の支藩、松山藩の家老から県会議員までを務めたという松森胤保氏 (1825-1892) は、「両羽博物圖譜・植物圖譜 (竹稻部 (酒田市立光丘文庫所蔵 : http://library.city.sakata.lg.jp/matumori/asp/ym_lst.asp :2018年2月22日アクセス確認)」の最終のページに1889 (明治22)年7月9日に描いたマツバイ (同図譜中では居苔 : イゴケ, 図-7-C) を示してこれに、

居苔 居草様ニシテ地面ニ平布ス一青愛スヘシ

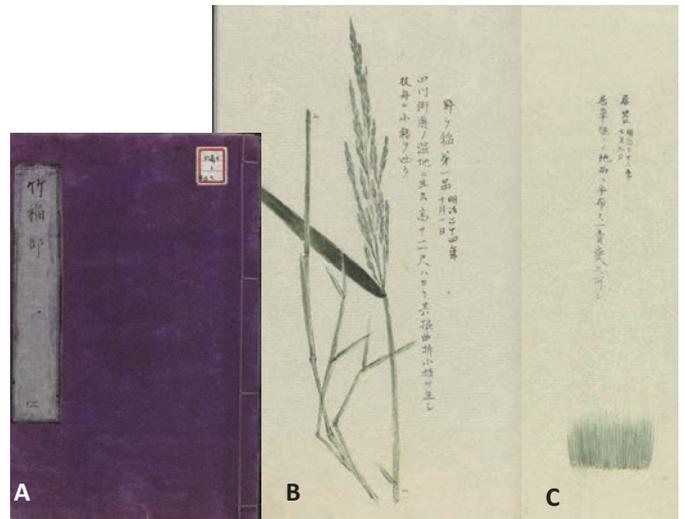


図-7 「A:両羽博物圖譜・植物図譜・穀物族 (竹稻部)」のはじめに出る「B:野ラ稲 (アシカキ)」と最終ページの「C:居苔 (マツバイ)」 (酒田市立光丘文庫所蔵、同文庫の許諾を得て、酒田市図書館HPより引用)

と付記した。松森氏の図譜はとても精密で、「竹稻部」にはスゲ属、カヤツリグサ属、フトイ属など約20種のカヤツリグサ科植物が描かれ、斑入りのタガネソウ (*Carex siderostica* Hance : 図譜中では生入タルザル草) とフトイ (*S. tabernaemontani* Palla : 同大井麴入) は観賞用として含められたと考えられる。カヤツリグサ科ではないが、この図譜のはじめのページには1891 (明治24)年10月1日に描いたイネ科のアシカキと見える図 (図-7-B) に、

野ラ稲 第一品 田川街道ノ湿地ニ生ス 高サ二尺ハカリ
 其根曲折小枝ヲ生シ枝毎ニ小穂ヲ吐ク

とある。日本でのアシカキの正確な図としてはごく初期のもので、これをイネの近縁と見た観察力に敬服する。

カヤツリグサ科植物が観賞用に重用されることは歓迎できるが、アクアリウム用などに輸入された植物が遺棄されて、しばしば水田や水系で増殖して問題となる。関係される方々は、導入の正確な記録と逸出防止のための管理にくれぐれも留意していただきたい。